心理臨床の専門性に関する一研究
―聴き手の内的体験過程の検討を通して―

鈴木優佳

〈論文要旨〉

心理臨床家の専門的な営みの根本には，クライエントの話を聴くことがある。クライエントの心の声に耳を傾けることが心理臨床実践の中心の一つであるため，心理臨床家は聴くことの専門家と言うことさえできるかもしれない。しかし一方で，ひとの話を聴くだけならば，心理臨床家でなくとも，素人にもできる行為とも考えられることもあり，“聴く”行為とは，一見すると，専門性など不要なとても簡単な行為にさえ見受けられる。このように，専門的な相談体系の一つである心理臨床実践と，日ごろからわれわれが行う悩み相談は，一見すると違いが見えにくいと思われるが，心理臨床家の聴き方は，いったいどのような専門性を有しているだろうか。本論文は，心理臨床実践において，心理臨床家がクライエントの声に耳を傾けることで何が生じているかを検討し，心理臨床の専門性の本質を問い直すことを目的としたものである。

第１章ではまず，これまでにわが国で論じられてきた，心理臨床の専門性を整理することを通して，専門性のもつ特殊性を論じた。心理臨床の専門性に関しては，資格化や法制化の動きなどを通して，操作的に定義されてきた専門性がある一方で，個々の心理臨床家自身がそれぞれの専門性イメージをもっているとされてきた。そこで第１章では，心理臨床家が実践での体験を基に記した，専門性に関する言及を帰納的に集約し，再定義することを試みた。専門性を捉えるための視点として，ⅰ目的に関する言及，ⅱ技能に関する言及，ⅲ態度や姿勢に関する言及，ⅳ関係のあり方に関する言及の四視点から，専門性のもつ性質を検討した結果，水準の異なる性質が，専門性という概念に併存するという特殊性が示唆された。ゆえに，心理臨床実践における専門性を本質的に捉えるためには，高度な知識と技能を追求し一つの方向性に収束していくような一般的な専門性イメージではなく，むしろ相反する要素を両立していこうとする専門性の形を有しているという特殊性を理解することが必要であると示唆された。そして，このような相反する要素を両立させるという特殊性を支えるものは，知識や技能と同等に重視されていた専門家の態度や姿勢，関係性のもち方などではないかと想定された。そこで，心理臨床家の“内的体験過程”に専門性の鍵があるのではないかと考え，論を進めていくこととなった。

心理臨床実践における専門性の特殊性を捉えていくためには，心理臨床家の外面上の聴き方だけではなく，その背景にある心理臨床家の心の動きについて考えていく必要があると示唆されたため，第２章以降では本論文の切り口として，心理療法における“聴き手の内的体験過程”を取り上げた。しかし，聴き手の内的体験過程は，明確な定義が存在せず，体系化がなされていない概念であるため，まず第２章においては，これまでに海外及びわが国で議論された，聴き手の内的体験過程にまつわる先行研究を概観し，本論文で扱

う当該概念のもつ性質を明確にしようと試みた。その結果，心理療法における聴き手の内的体験は，“自我水準”だけではなく，Jung のいう「超越機能」が働くような“超越水準”で生じてくることが示唆され，クライエントとセラピスト，過去と現在と未来，意識と無意識などの間に立ち上がってくるような性質をもったものであると考えられた。

続く第３章及び第４章は，第２章の検討を踏まえて，調査研究から，聴き手の内的体験過程の特徴を明らかにすることを試みた。まず第３章では，臨床心理士の資格を持つ聴き手 12 名（専門家群）と，臨床心理学を専攻しない大学生の聴き手 12 名（非専門家群）の調査対象者が，悩みの話し手の話を聴くというロールプレイ調査及びインタビュー調査を行った。ロールプレイ調査では，聴き手の行動傾向を検討するために，ロールプレイの音声データと逐語録データを分析対象にして群間比較を行った。その結果，専門家群は，非専門家群よりも「話し手の発話量」や「沈黙量」が多く，さらに「受容」や「くり返し」，「オープンクエスチョン」などの発言や「面接後半部分での解釈」の発言が多いことが示された。ここから，聴き手がじっくりと聴き役に徹するような聴き方をすることで，面接の前半では話し手の体験が深まるように関与し，話し手の心の内側の世界について考えを巡らせており，それに裏打ちされた言葉として，面接の後半で言葉を述べている可能性があると考えられた。このように，一見するとどちらもただ聴いているだけにみえる行動が，実際には専門家と非専門家との間で，構造面及び内容面で全く異なる聴き方がなされていることが，客観的な数値として示された。これらの違いを生み出す聴き手の内的体験過程を検討するために，インタビュー調査では，悩みを聴いている過程に関する語りの内容を M-GTA を用いて分析した。そこで導き出された両群の体験のプロセスの比較を通して，内的体験過程のありようを検討した。その結果，専門家群は，思考のプロセスの大きな枠組み自体は非専門家群と類似したものをもちつつも，聴き手自身の枠組みから思考する非専門家とは異なり，話し手側のさまざまな手がかりを用いて思考することが大きな違いであった。また，俯瞰の視点を持ち，象徴性や身体性，イメージを伴って話し手の心を理解しようとすることも，非専門家群にはみられない特徴であった。ここから，専門家群の聴き手の心の内側には，複数の事柄が併存して保たれているという特徴があることが示された。そして，聴き手の内的体験過程を構成する四つの要素――思考的要素，感情的要素，感覚的要素，直観的要素が見出された。Jung のタイプ論を参考にして考察したところ，心理臨床家は，これら四つの要素を両立させて，全人格的に話し手の話を聴いているのではないかと示唆された。

第３章での検討を通して，専門性と関わる聴き手の内的体験過程では，さまざまな要素が関連し合って働き，多次元的に動きを織り成していると考えられたため，第４章と第５章ではフェーズに沿って論を深めていくことを試みる。続く第４章では，聴き手と話し手の関係性に着目することで，聴き手の内的体験のより無意識的で力動的な過程を捉えることを試みた。第３章の調査対象者と同様の専門家群と非専門家群の聴き手に，第３章で検討したロールプレイ中の話し手との関係性をいかに体験していたかを尋ねた。その方法としては，関係性のもつ力動的な特徴を表現しやすくするために，聴き手と話し手を表す円

を用いて，体験した関係性をイメージとして表してもらう手法をとった。そこで表現された動きに着目して分析をした結果，専門家群と非専門家群の間には，関係のもち方に異なるありようが示された。それは，非専門家群の聴き手が，悩みや経験を実際的に共有することで相手に接近しようと試みていたのに対し，専門家群の聴き手は相手の情緒を理解しようと試み，より核心に近いところに触れようとする過程が見受けられたという違いであった。それゆえ，心理療法過程では，聴き手と話し手の間で，より深い次元で主体の交絡が生じているのではないかと考えられた。そのプロセスを質的に検討するために，続いて，専門家群の聴き手の内の 2 名の語りを取り上げて分析した。その結果，相手の情緒を理解しようと試み，より核心に近いところに触れようとする過程で，聴き手の内側にはイメージの形で，話し手に関する理解が生じてくることが示された。そのイメージは，聴き手の自我だけによって生成したものではなく，話し手との間，つまり面接空間において生成されたものでもあると考えられた。

続く第５章では，第４章で示された心理療法の聴き手に特有の体験過程について，多角的に検討することを試みた。通常心理臨床家は，心理療法のセッションごとに，そこで生起していたクライエントの心の動きにふれようと試み，これまでのプロセスを読む作業をするとされている。これは，第４章で示されたように，聴き手の内側にイメージの形で生成されてきたものを，つなぎ合わせて理解を推し進めていく動きであると考えられる。そこで，一回のセッションを対象とした検討であった第３章，第４章から視野を広げて，第５章では，心理療法のプロセスに関連する心理臨床家の内的体験過程を検討した。さらに，このようなクライエントを理解するための視点が，心理臨床家間で，どこまでの共通性をもつかについても検討する。そこで本章では，複数の心理臨床家が同一の心理療法事例を読んだ公刊事例の文献を対象として，質的検討及び量的検討から考察を試みた。まず，質的検討の結果，自律的な性質をもって広がっていくイメージに対して，心理臨床家が自らの主体を関与させることで，関連性や展望性を見出していく動きが起こっていると示唆された。ここから，イメージから関連性や展望性を判断し，意味づけて理解をするのは，心理臨床家の内的体験過程で行われる能動的な動きが影響していると考えられた。さらに，量的検討からは，事例報告の中で心理臨床家が着目するエピソードは高い精度で共通性がみられることや，着目したエピソードから生成される考察についても事例概要に関する部分には共通性がみられることが示唆された。しかし一方で，徐々に心理療法が展開していくにつれて，実際に事例を担当したセラピストと，それ以外のコメンテーターの間には，イメージや理解にずれが生じてくることも示された。この結果は，心理臨床家が専門的な視点や知識を基盤にしている専門家であると同時に，心理療法の場で生じていることを体験することを用いる専門家であることを示していると考えられた。

そして最後に，第６章及び第７章では，ここまでの調査研究を通して明らかとなってきた心理療法における聴き手の内的体験過程が，実践の中でいかに働いているかを検討した。まず第６章では，筆者が行った臨床事例の検討を通して，クライエントの変容とセラピストの

内的体験過程の関連について論じた。ここでは，言葉での意思疎通が難しかったクライエントとの事例と，セラピストが事例の経過中に見た夢を取り上げた。前者の事例では，クライエントとの言葉を介したやりとりが乏しくとも，セラピストの内的体験過程では，第３章で示された四つの要素がすべて機能していたことが示された。そして，断片的なクライエントの表現が，セラピストの内側で意味をもち，つながっていったと考えられた。また，後者のセラピストの夢については，セラピストの内的体験過程における無意識的な要素が示された。セラピストはいまだ意識的には気づいていないが，どこか直観的に受けとっているクライエントの内側の動きを，夢を通して体験したと言え，それにより，クライエントの中で生じている新たな可能性が，セラピストの中でこれまでのクライエントとつながったと考えられた。両事例の検討から，セラピストの内的体験過程には，クライエントの言動や表現から立ち現れてくるイメージや理解が漂い，それらがまずはセラピストの内側でつながっていくこと，そして，そのような存在のセラピストと面接室の中で共に過ごすことが，全体性を生きようとするクライエントの変容を支えているのではないかと考えられた。

最後に，第７章では，ここまで検討してきた心理療法におけるクライエントとセラピストの二者間の中での聴き手の内的体験が，他の職種との協働を行う心理臨床実践の場ではどのように展開しうるのかについて，質問紙調査とインタビュー調査によって検討を行った。その結果，協働の場で生じてくる，協働者と心理臨床家との間の難しさや，対象者・協働者・心理臨床家の三者間の難しさが存在しても，目の前の対象者であるクライエントに，心理臨床家の主体を関与させながら，さまざまな水準から思考をし，直観的なイメージに開かれ，自らの感情や感覚を理解に活かして，見立ての生成や専門的な理解をしていく体験をしていることが示された。このように，自らの心の動きを用いながら理解を進めていこうと試みることは，心理療法の場だけではなく心理臨床実践の場でも同様に働いていたことから，このありようが心理臨床家の専門性の一側面と言えるのではないかと想定された。

序章から第７章にかけて，“聴き手の内的体験過程”という視点を切り口として，心理臨床実践において，心理臨床家が対象者の声に耳を傾けることで何が生じているかを検討し，心理臨床の専門性の本質を問い直してきた。それらを踏まえて終章では，聴き手の内的体験過程について総合的に考察し，そこから導き出される，心理臨床の専門性について，本論文なりの結論を論じた。本論文で明らかにされてきた聴き手の内的体験過程とは，聴き手自身がクライエントとの場で生じていることに開かれつつも主体的に関与して，関連性や展望性を見出し，さまざまな要素を自分自身の内側を通してつないでいくというものであると考えられた。ゆえに，心理臨床家が心の声に耳を傾けることとは，心の声を聴こうとして，自分自身の内的な体験を刻々と変化させて，能動的にそれらと対話していこうという試みと言える。本論文で示してきた内的体験過程は，こうした聴き手の主体的なありようの表れであったと考えられる。そして，刻々と自分自身の内的体験過程を変化させながらその場にいる聴き手の存在は，聴き手が意図的にクライエントに働きかけるか否かに関わらず，その場自体を既に変容させており，その空間に包み込まれるクライ

エントにも必ず影響を与えている。ここに，心理臨床の専門性の一側面があると考えられ，本論文全体のまとめとして結論付けることができた。一方で，セラピスト自身の個別性あるいはセラピストとクライエントの関係性の個別性など，心理臨床においては常に個別性と普遍性の議論が残るように，聴き手の内的体験過程についての議論もまた同様に個別性を踏まえつつ普遍性の部分を掬い上げていかねばならないという課題が残る。特に，本論文では，深層心理学的なオリエンテーションに限定した議論をしてきたため，今後は他の学派にも視野を広げて検討していくことが求められる。これらの課題に加えて，心理臨床家の内的体験過程だけではなく，クライエント側の内的体験過程とも関連させながら，今後も研究を進めていくことが必要である。